

はゞきは、きやはんともいふなり、すねあての下にはくなり、地は繻子なり、又常にもるぼし上下の時は、かならず是をはくなり、赤すねの見ゆるは尾籠なり、裏は絹にても布にても縫ふべし、うしろにもかゝりをするなり、緒は長さ二尺五六寸許、人のすねの大小によるべし、
〔嬉遊笑覽二上〕女〇の脚〇半〇は、享保二年、娘容儀草子に、昔は八瀬大原の女ならでは、脚半といふものは、かざることなりしに、近年の女世智かしこくなりて、歴々の奥様まで小袖の裾をいとせられ、紅の脚半蹴かへしに見えて、其女中の下心思ひやられて、さもしかりきといへり、今は老婦半にてありくは見えなれど、其外にはなし、また茶屋女などの年たけたるは、パツチをばくあり、幼き女子は、良賤ともに、紅の帕ツチをばき、花見野がけに出、〇下略

〔倭訓栞前編二十四〕はゞき〇中

山城國大原の薪を賣女の脛巾は、前の方にて合せ結ふ、昔建禮

門院此山に入せたまひ、薪を戴き下山あるを、人買べきといへば、頓てうしろむかせたまふ、其餘風也といへり、

〔東遊記二〕寒氣指を落ス

雪深く、〇中夕ごとに宿屋に著ても、草鞋脚絆其儘には解す、彼地國〇北の者、其足圍爐裏にくべ給へといふにぞ、初の比はあやしくをかしかりしかど、餘りに脚絆のとけざるゆへに、教のごとくに任せて、いろりに足さしくべたるに、火のあつきを覺へず、

〔守貞漫稿男十五〕脚絆

諸國ニテ製之ト雖ドモ、大津脚半名アリ、江ノ今モ多ク賣、京坂ト同製也、紺木綿ヲ以テ製ス、白淺黄モアリ、單也、

大津脚半 京坂ノ人用之、木綿一幅ノ下ニ一ヒダトリテ下ヲ挾グス、長サ七寸餘也、鯨尺也、紐ハ木綿幅五分バカリニ織テ、兩端ヲ組紐ニ製シタル織成モノ也、又雲齋木綿ニテ製シタルモアリ、三度飛脚、宰領等必ズ用之、紐ハ木綿脚半ト同物也、宰領ハ必ズ紺也、其他ノ旅客モ紺ヲ專トスル也、淺黄稀也、